

---

# 北天女神譚異聞～いぬめがみっ！～

羽衣石

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

北天女神譚異聞〜いぬめがみつ〜

### 【Nコード】

N0342M

### 【作者名】

羽 衣石

### 【あらすじ】

とある駅前のワンルームマンションに独りで暮らす白戸治郎<sup>しやうご ちろう</sup>は、日曜日の朝目覚めてみるととんでもないことになっていた。助けを求めてかけた電話は天上界へとつながり、彼のもとにひとりの女神が降臨した。??原作「ああ女神さまっ」における女神とお助け女神事務所について、独自の解釈と設定をした作品です。おまけに今回は原作のキャラがベルダンディーすらほとんど登場しない、オリジナルストーリーとなっております。?その辺りをご諒解の上でご覧下さい。

c p t ・ 0 1 紅い女神（前書き）

原作を元に設定及び構成しておりますが、独自に解釈した部分を多く含みます。

c p t ・ 0 1 紅い女神

アスガルド。天上界と呼ぶ者もいる、神々の住まう所である。三層九界に分かれる宇宙の上層に位置し、強い光りに溢れる世界であるとされている。中央に最も巨大な世界樹であるユグドラシルがそびえ立ち、大地から吸い上げ葉に集めた力を、世界に住む者たちに余すところ無く注いでいた。

ある日、アスガルドの美しい女神の一人が人間の世界へ降臨する。そして人間の男と恋をして幸せに暮らすようになるのだが……この物語はそれよりも少し前の出来事である。

「なんじゃこりゃー！」

白戸治郎は顔を洗いかけた時、鏡に映ったものを見て愕然とした。そこに映っていたのは白い犬の頭部だった。

両手でぺたぺたとその顔を触る。手は間違いなく人間の、治郎自身の手だった。小学生の時自転車で転んでできた左手の痣がそれを証明していた。だが、犬なのである。長く伸びた鼻面の先は黒くしつとりと湿っており、健康状態が決して悪くないことを物語っている。ぴんと上を向く耳は意識してかどうか自分でもわからないが、時折左右対称に動いている。そして瞼の中をいっぱいに占める瞳孔が、我ながら愛らしかった。

夢だ……。

そう結論づけてベッドに向かい、彼が布団を被ったことを責める者は誰もいない。いや、誰かいたとすればもっと大騒動になっていたであろう。

彼が駅近くのワンルームマンションに一人暮らしであったこと、この日が日曜日でおかつ彼がこれといって予定を立てていなかったことが幸運であった。

それから約二時間後、午前十時を回ったところで彼は再び目を覚ます。ベッド脇に立てかけたプラスチックフレームの小さな鏡を覗いて彼は絶望した。そこに見えるのは、やはり犬の顔だったのである。

スウェットを着替えることもできず、治郎は折りたたみベッドの上に座りうなだれていた。なんでこんなことになったのか、彼にはさっぱりわからない。そして今、何をしたらいいのかさっぱりわからなかった。だが、そんな彼を次の行動に駆り立てたのもまた彼自身である。

ぐう……。

彼の腹から静かな音がした。黙って立ち上がると、キッチンスペースに向かい、食パンを二枚トースターで焼いた。彼はきつね色以上の少し焦げたくらいのトーストを好む。マーガリンを塗り、冷蔵庫から取り出した牛乳パックからコップに注ぐとして、コップではなく深皿に牛乳を注ぎ入れた。

ベッドの横の小さなテーブルにトーストと牛乳の皿を置き、彼は胡坐あぐらをかいた。顔を深皿に下ろし、静かに舌を出す。昨日までとは舌を出し入れする感覚がまるで異なってしまった。ゆっくりと舌で牛乳をすくい、口の中に飲み込んでいく。動作は見よう見まねだが、何とかこぼすことなく飲むことが出来た。牛乳の味それ自体は変わっていないかった。トーストをつかんで啜え、食い干切り咀嚼する。食べるという動作については不思議と違和感がなかった。かんでは飲み込み、牛乳を舌ですくってはまた食べる。食事にかかる時間はいつもと変わらなかった。

人心地ついてから見回せば、首から下は何の変わりもない元の身体だった。立ち上がり衣服を脱ごうとして、襟元があごにひっかかり難儀をした。上を向きながら剥がすようにスウェットを脱ぎ、そのまま全裸になるとユニットバスに飛び込みシャワーを浴びた。

熱い湯をひとしきり浴び、いつものようにボディソープで汗を流す。そしてシャンプーを手のひらに乗せようとした時、鏡に映る自分の顔が視界に入る。白く短い毛並みはすでにシャワーの湯を弾き返し、全く濡れていなかった。

衣服を着替えたものの、再び治郎はベッドに座り途方に暮れていた。コットンシャツを選んできたのは、先ほどスウェットを脱いだ時の苦労を思い出していることである。

「どうすりゃいいんだよ。」

誰かに相談するか。だけど誰に？

今の自分の顔を見て平然と話ができる人間がいるとは思えなかった。何度鏡を覗いても、そこにいるのは白い毛並みの犬以外のものではない。昔見たアニメ映画や幼児向け番組の登場人物のように、大きく愛らしい目で見つめ口を横に開けて笑ったりしていない。ただの犬なのである。

「病院だよな、やっぱり。」

病院ってどっちの？人間？動物？誰かにそう突っ込んでほしい心境であった。

とりあえず電話帳で人間の病院を調べる。大きい病院で人目にふれるよりは、実家の近くの開業医の方がいいかもしれない。だけど途中で誰かに見られたらどうする？帽子じゃどう考えても隠せんぞぬいぐるみ被つてると言い張るか？それで警察に声かけられたら元も子もないぞ。いつそ救急車で搬送してもらうか？いや、自分で騒ぎ大きくしてどうすんだよ。

独りベッドの上でのた打ち回っていた治郎であったが、ふと電話帳の広告に目が留まる。市内にある総合病院の荒い白黒写真だった。その写真を見て、小学生の時常に学年トップだったヤツが最近内科医として赴任したと母親から聞いたのを思い出した。

「ボクはねえ、将来大学に行って医者になるんだよ。しつめの悪い

犬みたいな君と一緒にの班になるのは嫌だねえ。」

六年生の時、メガネを拭きながらそう言い放ったヤツの顔面に思いつき蹴りを入れて泣かせてやった。その後担任に殴られるわ、母親がヤツの親に平謝りするわで大騒動になった。ヤツとは全く口を利かなくなり、小学校を卒業してから会っていない。

それはそれとしても病院で受診する前に誰かに相談したかったし、その相手が医者であるほうが望ましいとも考えた。電話帳を見ながらその病院の番号を押す。日曜日なのでヤツが出勤しているかどうかかわからないが、若手だけに当直させられている可能性もある。

そんな風に考えている間に、受話器の中でしばらく続いた呼び出し音が途切れた。

「あ、あの、ちょっとお尋ねしますけど……。」

「はい、こちらお助け女神事務所です。ご用件はそちらでお伺いたします。」

電話の向こうで女性の声がそう告げたが、それで突然ぶつりと切られてしまった。間違えたか、と思った瞬間受話器から高温の熱が治郎の手に伝わり慌てて床に投げ落としてしまった。

受話器の小さな穴から放出された熱が炎へと変わるのに時間はかからなかった。めらめらと燃え上がる炎はあつという間に吹き上がり、治郎の犬になった顔を照らしていた。煌々しい灯りに彼は見とれてしまい、なぜか火災を心配するどころではなかった。

炎の先端はわずかに天井まで届いていたが、焦げることも燃えることもなかった。床に敷かれたカーペットも一人暮らしを始めたころから置いている座布団も同様に類焼することはない。

次第に炎が絞られていき、やがて人間の身長ほどの高さとなる。

そして収まった炎の中から一人の女性が現れた。長い濃金髪が揺れ、アッシュブロンド胸元で豊かな乳房を隠す。あまりの展開に治郎はその女性が全裸で出現したことに気がつかず、あつと思った時にはその美しい肢体に

どこからともなく湧き出た紅い生地がまとわりついていった。目を閉じて屹立する彼女の身体に這うように巻きついていった生地は、誰の手によることもなく衣装へと変化していった。

情熱的な紅い色のドレスのところに黒い刺繍が彩られている。ボディライン体幹をくつきりと浮かび上がらせる扇情的な仕立とは裏腹に、袖は手首まで詰められ胸元も閉じられ肌の露出はほとんど無い。細面でまつ毛が長く、切れ長の細い双眸と淡い口紅をひいた唇は優しい表情を浮かべている。

「こんにちは、わたしの名前はアンネローゼ。天上界のお助け女神事務所に所属する一級神二種上級後方支援員の女神です。」

目の前で起こった状況に治郎はあんぐりと口を開けていた。朝からとんでもない事になっている彼には、もはや口から舌を垂れさせる以外のことができなかつたのである。

「私たち女神はあなたのようにお困りの方をお救いすることを務めとしております。天上界の大いなる力、ユグドラシルの采配によりあなたは私たちの救済を得ることが適いました。白戸治郎さん、あなた何か困ったことは……あるみたいですね。」

「これ、お返ししますね。」

アンネローゼと名乗ったアッシュブロンド濃金髪の女性は、拾い上げた受話器を白戸治郎に手渡しながらカーペットの上へ静かに腰を下ろした。燃えちゃったんじゃないんだ、と思いながら治郎は受け取り充電器の上に戻した。

「えっと、女神って？」

「女神は女神よ。あなた、女神知らないの？」

知らないということはないが、会ったことのある人間はそうそういないだろう。

「あなたは、人間？」

至極まっとうな質問だが、いきなり炎の中から現れた女に言われ



たくなかった。

「人間だよ！そりゃ、朝起きたらこんなことになってたけどさ。」

「ごめんなさい、そういうつもりじゃないの。知り合いにあなたみたいなひとがいるから。」

てことは、そいつは人間じゃないのかよ。

「アンネローゼ……だっけ？」

「ええ、そうですよ。あ、これどうぞ。」

手渡された名刺が治郎には全く読めなかったのは言うまでもない。  
「わたしはあなたの願いをかなえるために天上界からやってきました。どんなお願いでもかなえてさしあげられます。」

「どんな願いでもホントにかなえられるのか？」

「もちろん。一生かかっても遣いきれない財産を手に入れることもできますし、世界の破滅を望まれるならそれも可能。もっともそんなお願いをする人のところには降臨したりしないですけど。」

治郎にとっては今自分の置かれた状況を考えれば、他に頼むべきお願いは無いはずだ。

「何だったら、今すぐここで男性としての至高の喜びを味わうなんていうのもありよ。」

それまで澄ました微笑をたたえていたアンネローゼが急に妖艶な表情を浮かべる。そう言われて治郎はごくつと生唾を呑み込んだが、彼もそれなりの経験を積んだオトナだった。

「あのさ、もしかして俺のことからかってる？」

「まあ、ちよつとだけね。」

そう言いながらにつこり笑うアンネローゼに怒る気が失せた治郎であった。

「何で俺、こんなことになっちゃたんだろう？」

「拾い食いでもした？」

「してねえよ！犬じゃあるまいし。」

そう言って治郎はうなだれた。自分の言葉に相当落ち込んだようである。

「で、何をお願いするの？」

「頼むから俺を元の姿に戻してくれ。」

そのつぶやきを受け、アンネローゼは静かに瞳を閉じた。周囲に満ちた柔らかな光が、彼女の額にある薄赤い紋章に集まっていく様を見て治郎は再び啞然とする。聞き取れぬ言葉を詠唱していたアンネローゼだったが、やがて光が薄れ行くのと同時にゆっくりと瞼を開いた。

「あなたの願いは受理されました。」

「ほんとか、今すぐ元に戻してくれるのか。」

「それは無理。」

返ってきた言葉はあまりに素っ気なかった。

「なんじゃそりゃー！」

激昂して立ち上がった治郎だったがアンネローゼに、

「お手。」

と言われて素直に右手を差し出してしまい、またもへたり込んでしまった。

「気にしなくてもいいわよ。今のはわたしの言霊ことだまに操られただけだから。」

「やめてくれよお、かなり傷つく。」

「よしよし。」

そう言いながらアンネローゼはにこしながら治郎の頭を撫でた。それが善意による行動であることは彼にもわからないわけではない。

「今すぐにつてのは無理。あなたがこんな姿になってしまった原因を突き止めるのが先よ。」

「突き止めるって、女神ならすぐにわかるんじゃないのかよ。」

「人間界で犬になる病気が流行ってるのなら、話は早いんだけど。」  
「シャレにならんこと言わないでくれ。」

そう言ってからぐるぐと無意識に喉を鳴らせた自分に驚いたのだった。彼のあごの下を優しく撫でながらアンネローゼは言う。

「病気じゃないのなら、原因は呪いしかないわ。」

アンネローゼの愛撫に目を細めていた治郎は危うくその言葉を聞き漏らすところだった。

「呪いって、誰が俺を呪ったりしたんだ？それに、一体何のために？」

「それを特定することはまだ出来ないけど、直接もしくは間接的に魔属が関わっていることに疑いの余地は無いわ。動機は、それこそ突き止めて白状させるしかないわね。」

「女神とか何とか言って、結局何にもできないんじゃないか。」

「失礼なこと言わないでよ。あなたを元の姿に戻すにはそれなりの手順を踏まなくてはならないって言ってるの。」

アンネローゼの声が小さくなった。

「あなたの肉体は魔術により強制的に変換させられているの。誰かがあなたを困らせようと願ってそれを魔属がかなえたんだとしたら、魔属と契約した人間を見つけ出して解約させなければならぬ。もし魔属自身の呪いだとしたら、その魔属から呪文を聞き出さなければ解呪できないわ。」

「じゃあ、まずどうするんだ？」

「そうね。呪われたのが昨日のことだと仮定して、あなたが辿った行動を確認し出会った人間に一人ずつ当たっていくのが基本かしら。」

「どうやって？」

「それは簡単じゃない、昨日と同じ行動をすればいいのよ。」

「だ〜か〜ら〜、こんな犬頭でどうやって外に出るんだっちゅーとるんだ！」

アンネローゼはそこまで言われてはたと気がついた。

「あつそうか、人間界だと頭が犬の人なんていないものね。」

「何界だとそういうヤツがいるんだよ。」

治郎がかみつきそうな勢いでアンネローゼに喰ってかかるが、伏せの一言でベッドの上に這いつくばらされた。全くもって女神の言葉は強力である。それでも次郎は不屈の精神で女神の力に抗い反論を試みる。さながら縄張りに固執する野良犬のようであった。

「この姿をどうにかするのが先じゃないか、何とかしろ。」

「そんな風に頭ごなしに言われるは好きじゃないわ。」

「人のことねじ伏せておいて、何が頭ごなしだ。」

「いいわよ、そこまで言うなら対抗法術使ってあげるわ。ただし、簡単に元の姿に戻るわけじゃありませんからね。」

アンネローゼは立ち上がるとテーブルを引っぱって部屋の隅に移動させた。宙に浮かせて移動させたりしないのか、と治郎は思ったが口には出さずに見守っていた。右手をかざしながらアンネローゼが小声で何かつぶやくと、カーペットの上に直径一メートルほどの円形が浮かび上がった。

魔法陣ってヤツか？と思った途端、治郎は見えない力で空中に持ち上げられ円の中央に無造作に落とされた。

「俺の扱いはテーブル以下かよ。」

「始めるわよ。」

魔法陣の中央で胡坐をかく治郎に正対する位置に立ち、アンネローゼは何やら複雑な言語を謡うように唱えていた。時折左右の腕を振りかざすと、その度に治郎の身体の回りを蛍のような光が飛び交っていく。淡い光が数を増す毎に、室内は少しずつ暗くなっていくように感じられた。

「おい、大丈夫なのかよ？」

「黙ってて！」

アンネローゼは治郎の言葉を遮り、さらに詠唱を続けた。アンネ

ローゼの額にある紋章が強く輝き、それに合わせるように治郎の周囲の光が帯のように繋がっていく。

「……己のあるべき姿を取り戻せ！」

その一言で光の帯が一気に治郎の身体を包み込む。閃光が弾け、さらにもうもうと煙があがる。その煙が薄らいでいくにつれ、治郎は身体にむず痒さを感じた。

「はい。」

アンネローゼが枕元に置いていた小さな鏡を手渡した。両手で受け取り恐る恐る覗き込むと、そこには昨日までと同じ治郎の顔があった。

「や、やったー！元に戻ってるよ。」

「あのね、よく見てくれる？」

そう言われて治郎は鏡を見直したが、何か問題があるようには見えな

「顔じゃなくて、手。」

そう言われて初めて、鏡を持つ手が白い毛と黒い肉球になっていることに気がつく。

「なんじゃこりゃー！」

「だから言ったでしょ。魔術を解析せずに対抗しようとしたって完全には戻せないのよ。」

「これじゃ何にもできないじゃないか！何とかしろよ。」

「まあ、さっきの方がかわいかったし……えいつ。」

アンネローゼが右手を振り上げると、ぼわんと煙があがる。

「歩きにくいだろ。」

今度は足だけが犬になってしまった。

「もう、えいつ。」

再び煙があがる。

「やだ、気持ち悪い。」

治郎の頭だけを残し、首から下が犬になっていた。  
「わざとやったな。」

「そ、そんなことないわよ。もう一回やるわね。」

そして再度上がった煙が晴れた時、治郎の姿は完全に白い犬になっていたのだった。

「お前なあ……。」

ぐるぐるとめきながらアンネローゼの鼻先にかみつかんばかりに迫ってきたが、女神の方は全く動じた風は見せなかった。

「まあまあ、その姿なら外出したって構わないじゃない。」

どこからともなく導紐<sup>リード</sup>を取り出しながら、アンネローゼは澄ました顔で言ったのである。

白戸治郎が生まれ育ったのは、地方にある人口六万人ほどの街である。生家は郡部との境界に程近い山間地で、今住んでいる駅前から十五キロメートル以上離れている。高校生のころはよほどの悪天候でなければ自転車で市役所近くの学校に通っていた。

そのころに比べれば人口は減少し、街の賑わいは失われつつある。泡沫<sup>バブル</sup>経済の崩壊を待たず、戦前からの主力産業であった製糸工場や縫製工場は産業構造の変化に対応できず廃業していった。県南から高速道路へ連絡する道路交通網の整備計画は頓挫し、赤字経営だった国鉄の支線は運行を休止した。中学から高校にかけての期間に目に見える範囲での不景気を目の当たりにしながら育った治郎だったが、それでも県外に出て行こうという気持ちはあまりなかった。

治郎が受験した県内の国立大学は不合格となり、何とか合格した大学に進学するため仕方なく九州へ単身移り住んだ。地元よりは大きな街で寮暮らしとなり、それなりに学生生活を謳歌していた。しかし、いつまでもここで暮らしたいとは思えなかった。

母親にもつたいないと散々言われながらも、卒業後に地元では比較的優良な企業に就職する。兄の結婚を期に実家を離れ、市内で最も賑わう地区のワンルूमマンションで一人暮らしを始めて三年。会社では何度か人事異動があったり、社内恋愛の末に涙を飲んだりと色んなことがあったが、まあまあ楽しく暮らしてきたと自分で思っていた。

しかしそれも、どうやら過去のこととなってしまったようだ。

「静かでいい街ね。」

アンネローゼは後ろに組んだ手で導紐<sup>ドーナツ</sup>を軽く握りながら歩いていた。その紐の先には犬になった治郎が繋がれている。四足で歩くの

に全く違和感がないことがむしろ不思議だった。

「国道が四車線に拡張されてから、全国チェーンの店とか増えたけどな。遊ぶ所があんまり無いよ。」

日曜日の午後、駅前通りを歩く人の姿はけっして多くない。県庁所在地の駅とは違い、駅も駅前商店街も閑散としたものだった。むしろ県内に点在する温泉地や、国立公園の山岳地帯の方にこそ人出が多いことだろう。都市部と違い、鉄道は大きな街を結ぶ本線のみで支線は十数年前に廃線となってしまったのだ。地域住民の多くが自動車で移動するのが一般的であり、それだけに日中徒歩で歩く人の姿は少ない。

そんな街中でアンネローゼの濃金髪と白い肌、そして青い瞳は十分に人目を惹<sup>ひ</sup>いていた。服装はあの紅いドレスではなく、至極普通の白いブラウスと若草色のスカートを身につけていた。治郎の部屋から一步出た途端、何の前触れもなく発光とともに着衣が変わったのである。それを見て治郎は驚きの声を上げたが、それは自分の耳にもキャンキャンとしか聞こえなかった。

「神衣で人間界を歩いたら人目につくことくらいわかっているわよ。でも時々いるのよ、派手な神衣のまま人間の街に行っちゃう女神がね。」

「女神ってそんなにしょっちゅう人間界に来てるのかよ？」

「まあね。さて、昨日のあなたの行動をたどってみるとしましょう。」

「午前中は部屋の掃除や洗濯して、昼はそこ食べた。」

治郎があごをしゃくって示すその先には、小さなビルの一階で店を構える蕎麦屋があった。

「よく行くの？」

「ああ。うまいんだよ、ここのかけ。」

「わたしも食べてみようかしら。」

「俺、財布持ってきてないぞ。」

「あなたが財布からお金を払ったら、お店の人びっくりするでしょ



うね。」

くすつと笑いながらアンネローゼは店の前まで近づいた。

「とりあえずいいわよ。後で必要経費として請求しますからね。」

「女神の救済って有料なのかよ。」

「冗談よ。」

蕎麦屋の木製引き戸をアンネローゼはがらがらと開けた。日曜日の昼時を過ぎて、店内に客は一人もいなかった。

「いらつしゃい。」

競馬場を映すテレビから視線を移しながら店主がアンネローゼに声をかける。

「暗い過去を秘めた男が一人で営み、悲しみを胸に抱いたお客さんが井一杯の温もりを求めてやってくる、そんなお店ね。」

「何だ、それ？」

「あなたみたいな平凡な犬にはわからないわよ。」

「犬って言うな！」

そんな小声の会話は耳に入っていないようで、店主はアンネローゼを凝視している。一緒に入ってきた白い犬には目もくれなかった。

「かけ。熱いところを、葱<sup>ねぎ</sup>抜きでください。」

注文を受けてなお店主はアンネローゼをにらみ続けていたが、やがて静かに背を向けると蕎麦を茹でにかかる。

「ねえ、治郎。人間界のお蕎麦屋さんって腰にガヴァメント差してるもんじゃないの？」

「お前、情報がなんか偏ってるぞ。」

「お待ち。」

カウンターでの会話に割って入り、店主が井をアンネローゼの前に差し出した。一度熱い湯気を鼻腔から吸い込むと、アンネローゼは鮮やかな濃金髪<sup>アシユフロンド</sup>を後ろで束ねた。箸を右手で静かにつかみ上げ、

一瞬だけ店主に視線を送る。彼はまだアンネローゼをにらんでいた。

「治郎。お蕎麦はね、中途半端に食べちゃダメなのよ。」

そう言うアンネローゼは豪快に音をたてて蕎麦をすすった。そ

んな女神の食べっぷりを、店主は太い腕を組みながら眺めている。

「姐さん、東京からですかい？」

「ええ、まあ。」

何で東京なんだ？何がまあなんだよ？それは、治郎にはついていけないやりとりだった。

蕎麦をすすりきり、丼を持ち上げてだしを最後の一滴まで飲み干した。そしてアンネローゼはつぶやく。

「いい景色だわ。」

何なんだよ、それは！

治郎は叫びそうになったが、その言葉をこらえてぐるぐるとなっただけである。

「おいくら？」

「結構でさ、いいモン見していただきやした。」

そう言って店主は深々と頭を下げる。それは常連の治郎ですら一度たりとも見たことの無い態度である。

「そう、ごちそうさま。」

「お氣をつけて。」

その言葉を背中に受けながら、アンネローゼは治郎と共に店を後にした。

「ふう、良かった。実はわたしもお金持ってなかったのよ。」

「おごってもらえなかったらどうするつもりだったんだよ。」

「まあ、皿洗いとか呼び込みとか。」

「ばか言ってるんじゃないよ。それで何かわかったか？」

「何かって？」

「俺に呪いをかけたヤツのことを調べて回るって話だったろーが！」

「ああ、そうだったわね。うん、彼は違うわ。」

治郎はため息と共に肩をすくめた。いや、本人はそのつもりだが、犬の身体で肩をどうすくめられるのか、女神ならぬ身にはわからない。

「で、昨日お昼を食べた後に歩いてこのお店までやってきたのね。」  
アンネローゼは治郎の後について国道沿いを歩き、青を基調とした外観の店舗の前までやって来た。駐車場から見上げれば、看板にはふたつの顔をひとつに重ねたかのような意匠が描かれている。

「昔、あんな顔した魔属と闘ったことがあるわ。」  
「知るかよ、早く俺を呪ったヤツをつきとめろ。」

あまりに呑気なアンネローゼの言葉に苛立ち、治郎はつい大きな声を上げてしまった。

「ママあ、あの白いわんちゃんおしゃべりしたー。」

二人の前を四才くらいの子どもがうれしそうに駆けていったが、母親は特に取り合う様子ではない。その後姿を見送りながら治郎はため息をついた。

「ここって何のお店かしら？」

「DVDとかCDを貸す店だよ。」

「貸すだけなのにお金取るの？人間ってちょっとケチなんじゃない？」

「いいから中に入って調べてこいよ。」

「治郎は入らないの？」

「こう言う所に犬は入らない方がいいんだよ。」

「じゃあ、しばらく待ってて。」

そう言ってアンネローゼは店内に向かう。自動ドアが開いた瞬間に女性の歌うテンポの速い曲が聞こえ、更に系列店でのみ放送しているアナウンスも治郎の耳に入ってきた。つい昨日も聞いた同じような曲と同じ声なのに、何だか遙か昔のことのようだった。この店に来た時も蕎麦屋に入った時も、俺は人間だったのに……。

何だかどつと疲れてしまい、治郎は夜間返却用の青い大きなポストの前でうずくまった。しばらく目を閉じていると、妙に乳臭いようなにおいが鼻をつく。うつすらとまぶたを開けると、さっきの子どもより更に小さい女の子が興味津々の表情で目の前にしゃがみこ

んでいた。その女の子が治郎の鼻先をちょんちょんとつついている。湿った感触が珍しいようで、女の子は何とも聞き取りにくい歓声を上げながら治郎の鼻をつまんでぐいぐいと引っ張り始めた。

ほんとの犬だったらかみつかれてるぞ。

そう思いながらも治郎は女の子の好きにさせていた。それがまた妙に気持ちよかったのである。快感に身を委ねていると、自分が人間だった時のことを忘れてしまいそうだった。しかし、飼い犬の幸福はそう長く続かない。

「こいつすげえかわいいー。」

「写メ撮ろ写メ。」

派手な化粧を施した、おそらくは高校生なのではなからうかと推察される二人の女が、女の子を押しつけて治郎の前に立ちふさがった。女の子のことが眼中に無かったのであるう、大きなおしりで突き飛ばしたことに二人組は全く気がついていなかった。転んだ女の子は泣きこそしなかったものの、治郎の方を悲しそうに見ていた。

それを見て治郎はかつとなり大きな声で吠えた。我が身に降りかかった不幸か呪いか、とにかくその鬱憤<sup>うっぷん</sup>を吐き出すかのように吠え、無駄に派手な二人組を追いつけた。

「何こいつきもい。」

日本語の使い方勉強しなおせ！

治郎のその熱い思いは、残念ながら「わん」の一言でしか表現できなかった。

転んだままの女の子に治郎は近づいていく。白い毛を小さな手でつかみながら、女の子は立ち上がった。向かい合えば、女の子と治郎の顔の高さはほぼ同じである。

「早くお母さんの所に行きな。」

治郎は女の子に聞こえるようにだけ、小さくつぶやく。彼女もまた小さくうなずくと振り向いて走り去っていった。建物の陰にその姿が消えるまで次郎は見送った。安心と寂しさを感じたその時、ふいに背後から何者かに背中をねじ伏せられた。

「こいつか、生意気なクソ犬ってのは！」

うめきながら治郎が必死に背後を見ると、金色に髪の毛を染め、これまた派手な衣服を身に着けた男だった。その後ろからさっきの二人組の女の舌足らずな声がする。

「こいつうちらに向かつて吠えやがったんだよお。」

「まじ恐かったあ。」

「よおし、見てろよ。俺様の強さを思い知らせてやる。」

正面にもう一人、更に背が高く肩幅の広い男が現れた。周囲の人間が非難がましい視線を送ってくるのに気がつく、「なんだこるあ」と恫喝して追い払う。そして逃れようと必死にもがく犬の頭部めがけて、男は大袈裟な動作で蹴りを放った。治郎は恐怖心に目を閉じた。

「わたしの契約者が何か失礼をしたかしら？」

しかしながら男の足は治郎に届かなかった。ふいに現れたアンネローゼが、何気なく差し出した左手で男の鋭い蹴りを食い止めた。二人の男はその美しさに見惚れ、蹴りを放った方の男は片足を上げたままの間抜けな姿勢で呆然としていた。

「治郎が何か悪いことをしたのならお詫びしますけど。」

「え、いや、その……。」

口ごもる男にむかって、アンネローゼはにこやかに言ったのである。

「じゃ、消えて。」

アンネローゼが左手を払うと男は物の見事に宙を飛び、乗って来たと思われる黒いセダンの開いた窓に放り込まれた。更に彼女が指をひとつ鳴らすともう一人の男も女たちも宙に浮き、同様に放物線を描いてセダンの中に飛び込んでいく。その度にやたらと車高の低いセダンのシャーシが、駐車場のアスファルトにこすれていった。

「お願いね。」

アンネローゼが黒いセダンに向かってウィンクすると、それに応えるかのようにヘッドライトが点滅する。そして黒いセダンは派手

にドリフトしながら駐車場を飛び出していった。しかし治郎の目線から見ても、男が運転席に座れたようには見えなかった。

「助けてくれてありがとう。」

治郎はアンネローゼの方を向き、小声で礼を述べた。

「いいのよ、契約者の身の安全を確保するのも女神の仕事だから。それに、あなたも女の子を守ったじゃない。」

「そりゃ、まあな。」

「段々犬らしくなってきたわね。」

「やかましい！それより何かわかったのかよ？」

微笑を浮かべつつも、アンネローゼは治郎の質問には答えなかった。先に店の前から歩道に向かって歩き出す。

「それで、昨日はこの店を出てから部屋に帰って、借りた映画を観てたのよね？」

「そうだよ、ってここでも何にもわからなかったのか。」

「わからなかったって言うか、発見があったわ。」

「何だよ。」

「ヒッチコックって人間の映画が面白そうだった。天上界に帰ったら観てみるわ。」

その一言に治郎はかっとなり、吠えながらアンネローゼを追いかけた。

「お前、いろいろ思案がありそうなこと言ってたくせに、何も考えずにうろついているだけじゃないか！」

「計画は白紙つてところかしら。」

ころころと笑いながら、アンネローゼは治郎につかまるまいと逃げ出した。踵ヒールの高い靴を履いているにも関わらず、アンネローゼは危なげのない足取りで駆けていく。四車線の国道を行きかう自動車を運転する人間たちが、午後の日差しの中で楽しい女神の姿に目を奪われる。それでも交通事故が起きなかったのは、やはり女神の加護と言うより他にあるまい。

アンネローゼの足元で忙しく四肢を動かしながら、治郎はワームマンションの階段を上がっていた。途中最上階の住人とすれ違ったが、女神に挨拶されて彼もまたぼうつとしている。ペット禁止の住宅ではあるが、そんなことは気にならなかったようだ。

ひと足先に階段を駆け上がり、治郎は振り返ってゆっくりと歩を進めるアンネローゼの顔を眺める。我が身に降りかかった不運に狼狽してそれどころではなかったが、落ち着いてみれば海外の映画に主演していてもおかしくないくらいの美貌だった。いつも治郎なら、こんな美人を間近に見ればそう落ち着いてはいられない。

「どうかした？」

五段ほど低い位置で、アンネローゼは治郎の視線を正面から見返した。

「いや、別に……。」

視線を逸らすと、自分の部屋の前に立つ人影が治郎の目に入った。アンネローゼは正反対の短く切った黒い髪、空色のワンピースを身につけた女性だった。

「可南子……今日は来れないって言ってたのに。」

「昨日部屋で映画観た後、待ち合わせして夕食を一緒に食べたのが彼女なのね？」

アンネローゼも階段を上りきって、治郎と並んで彼女の姿を見ていた。

「恋人？」

「ん、ま、まあな。」

ドアに背を預けて立っていたその女性がふいにこちらを見た。その目が治郎には昨日と違って見えた。静かに彼女が近づいてくる。声をかけようとして、だが治郎の口からは犬の鳴声すら出てこなかった。そのことに動揺してアンネローゼの足元をくるくると回って

いると、可南子と呼ばれた女性はすぐそばまでやって来た。

「あの、この階に住んでいらっしゃる方ですか？」

おずおずと、可南子はアンネローゼに尋ねた。

「いいえ、わたしは今日ここに来たばかり。住んでいるわけじゃないわ。」

「その部屋に住んでいる白戸治郎さん、どこに行ったかご存じないでしょうか？」

微笑みを崩すことなくアンネローゼは、可南子から視線を下ろし足元で所在無げにうつろつく治郎を見た。

「いないということはないと思うわ。きっと見えないだけよ。」

硬い表情でうなずくと、可南子は階段を下りていった。

「おい。」

治郎が下からアンネローゼに声をかけた。

「なあんだ、まだしゃべれたんだ。彼女に何も言わないから、人間の言葉忘れちゃったのかと思ったわ。」

先刻までならこんな言葉に喰ってかかっていた治郎が神妙に話す。もつとも顔つきは変わったようには見えなかった。

「可南子、今日は用事があるから会えないって言ってたのに何で来たんだ？」

「治郎に会いたかったからじゃない？」

「昨日と、いや普段と様子が違うような気がする。」

「彼女はあなたに呪ったりしてないわよ。」

アンネローゼのその言葉が耳に入らなかったわけではない。女神の言葉である。疑う必要は無く、まして治郎に疑う根拠など無いのである。それでも、今日は可南子に会うことはないと思っていて、彼女が気づいていなくとも今のこの姿を見られたことはやはり治郎には辛かった。

誰かが自分を呪った。それは、可南子なのかもしれない。

治郎の心に不安が影を落としていることをアンネローゼは気づいていた。だから治郎が黙って階段を駆け下りていくのを止めなかった。



た。

アンネローゼは手すりに肘をつき、マンションの前の道路を見下ろした。ほどなくして白い犬が早足で出て行くのが見えた。可南子という女性がどのような交通手段によってここまで来たのか、彼女は特に関心を持たなかった。だが治郎は彼女の自宅を知っているはずである。追いつくことはないにしても、そこまで自力で走っていくことだろう。

アンネローゼはこれまで治郎にただの一言も嘘をついていない。女神である以上、嘘などについてはならないからだ。だが真実の全てを治郎に語ったわけでもない。彼を取り巻く状況について、一緒に街を歩きながらある程度察しはついていった。しかしながら今の時点で解決させることはできない、もう少しだけ事態の推移を見守る必要がある。

「ベルダンディーなら、治郎のためにここががんばっちゃうんだろ  
うな。」

アンネローゼは駅の向こうの景色を眺めながら、後輩にあたる女神のことを思い起こしていた。初めて会ったのは、自分が限定解除を目指すことを諦めた頃だったと思う。

「お節介かもしれないけど、この仕事しながら勉強続けるのって厳しいわよ。」

まだ二級神だったベルダンディーが限定解除の神格を得ることを目指していると知った時、アンネローゼはそう忠告したのだった。その言葉に屈折した感情が含まれていることは自覚していた。自分は挫折したからだ。たぶん、ずいぶんと意地の悪そうな顔をして言っただけに違いない。

「ありがとうございます。わたし、精一杯がんばります。」

そう答えたベルダンディーの、その後の成長は目覚ましいものだった。そして現在、お助け女神事務所においてアンネローゼと同格の地位にまで昇格している。だからと言って控えめな態度を崩すことはなく、先輩であるミソラやアンネローゼに対し礼を失するような

ことは決してなかった。

ベルダンディーが見事に限定解除の神格を得るかどうか、この時のアンネローゼにはまだわからない。だが必ずや自分よりも大きな力を手にして、きつとお助け女神事務所の全ての女神を驚かせるような仕事をしてくれるに違いないとそう信じていた。

人間界の時間でこの数年後、ベルダンディーは天上界において一級神二種限定解除の位階を封じられる。そして任務のため赴いた人間界で彼女の取った行動が、女神どころか天上界全ての神々を驚かせることになる。しかしそれはアンネローゼの予想とはいささか異なるものであった。

自動車で移動すれば十五分ほどの距離である。治郎は必死で駆けていた。人間であつた時に比べれば足取りは軽やかだったが、それでも走り続ければ体温は激しく上昇する。無意識のうちに口を開き舌を長く垂れて、治郎は身体の熱を放出しようとした。一級河川にかかる橋を渡り、土手を駆け下り、住宅地の路地を抜けるうちに空が雲に覆われていった。

何度も尋ねた住宅街である。道は十分に知っていた。だが、視線が今までとまるで違い低くなってしまう。そのことが治郎の方向感覚を狂わせていた。目印にしていた看板や、旧家の生垣がまるで異なつた物に見えてしまう。必死に可南子の家を目指すが、幾度も角を曲がっても目指す景色が見えなかった。

くすんだ色の外壁を持つ家の前で立ち止まり、辺りを見回して考える。するとその庭を囲む格子から大きな猟犬種が、見知らぬ犬のにおいをかぎつけて低く大きな声で吠え立てる。人間の時なら少し驚くくらいのところを、身体が反応して必死に逃げ出してしまう。鎖に繋がれた猛犬が追い駆けて来られるはずがないと気づいた時には、再び治郎は見知らぬ路地に立ち尽くしていた。そんなことをもう何度も繰り返している。

居場所を追われ、飼い主を必死に探す犬の心境だ。いや、今の治郎はまさに犬なのだが、犬の姿で必死に走っているうちにほんの昨日人間であったことを忘れてしまいそうだった。彼の心はただ、可南子に会いたいという気持ちだけだった。

風に乗って懐かしいにおいが治郎の鼻をくすぐった。そのにおいが、治郎の脳裏に多くの記憶を呼び起こさせた。同時に肢が動く。迷いことなく、そのにおいを頼りに駆けていく。走るうちに全てを忘れ、自分の会いたいたひとり人のことだけを思い描く。どこを曲がりどう走ったのか、全く記憶に残っていなかった。ただひたすらに走っていた。

ポストのある角を曲がり、ようやく見覚えのある白い壁が目に入る。広い庭に濃紺のセダンと赤い軽自動車並び、その横の鉢植えに空色のワンピースを着た女性が水を撒いていた。

ようやく会えたのだ。愛しいその姿を見て、心に影を落としていた雲が温かい風に流されていくような気持ちだった。このままその胸に飛び込みたい、そう思うと居ても立ってもいられなかった。再び走り出しながら、治郎は愛する女性の名を叫んだ。

「わんっわん！」

あれ？

「きゃんつきゃん！」

え？

可南子の足元で、毛並みの柔らかい小さな犬が怯えて跳ね回っていた。水を流したままのホースを投げ捨て、可南子は小さな愛犬を抱きかかえ懸命になだめた。

「ラニくん、どうしたの？何が恐いの？」

腕の中で暴れる愛犬の様子に、ようやく可南子は見知らぬ犬がすぐそばまで来ていることに気がついた。治郎に向けるその視線が、まるで悪魔でも見ているかのようだった。愕然として、治郎は立ちすくんでしまった。

「ラニくんが恐がつてるじゃない、あっちに行つて。」

可南子は左手で愛犬を抱いたままホースを取り上げると、指先で先を絞り治郎に向かって勢いよく水をかけた。普通の犬であればそれですぐに逃げ出したであろう。

だが、治郎は直撃する水流に目を背けながらも可南子のもとへ近づこうとした。その姿にラニくんと呼ばれた小型犬は恐れおののき、可南子の胸でさらに激しく暴れていた。

「お父さん、助けて。」

可南子の呼び声に父親が玄関から慌てて飛び出して、手にしたほうきで治郎を力一杯打ち据えた。その痛みに治郎はついに逃げ出した。十メートルほど走って立ち止まり、もう一度振り返った。その目に映った可南子の表情は、彼の知らない顔だった。言いようのない悲しさを覚えて、治郎はその場を後にしたのである。

そして、雨が降り始めた。

住宅街を離れ、治郎は土手の上をとぼと歩いていった。雨はしだいに強くなり、大粒の水滴が白い毛を濡らし身体を冷やしていく。うつむいて路面を見ながら歩いているので、額から両目を伝って鼻先へと水滴が流れ落ちていく。

「泣きながら歩く犬なんて、世界中探したって俺だけだよな。」

来る時は風のように走り抜けた道であったが、帰りの足取りは重くいつまでたっても駅前へ至る橋に辿り着かないような気がした。

雨雲に覆われた空は、夕方を通り過ぎてあつという間に暗くなっ

だいたいいる

た。土手の下の道路に並ぶ街灯の光が、落ちる雨粒を橙色に照らしている。とぼとぼと四足で歩く治郎が街灯に近づくと、白い毛が明るく染まる。そして離れれば影に埋もれる。何本の街灯を通り過ぎたのか、治郎は数えていなかった。

影と光の繰り返しはこのまま永遠に繰り返されるのだろうか。

このまま俺は犬として、可南子に嫌われたまま生きていくのだろうか。

ようやく駅前渡る橋に辿り着いた時、袂を照らす街灯の下に傘をさした女性が立っていた。その傘は治郎の部屋にあった、ビール製の安い傘だ。不思議なことに傘が濡れていない。雨粒は彼女の周囲一メートルの範囲に全く入ってきていなかった。

「お腹すいたでしょ、帰ってこれ食べましょ<sup>なか</sup>う。」

アンネローゼが左手に持った袋を掲げ上げる。海外に本社のある企業が全国に展開する店舗で販売している、鶏肉の唐揚げであった。じつと立ち止まって女神を見つめる治郎の姿は、まさに捜し求めた飼い主によりやく出会った白い犬のようだった。アンネローゼは治郎に駆け寄り傘をさしかけた。

「帰ろ。」

その言葉に、治郎は再びとぼと歩き始めた。アンネローゼは何も言わずにその横について歩いた。また、言霊に操られたのかもしれない。治郎はそう思いながらも、待っていてくれるひとがいて、帰る家があることに安堵した。

ふたり、いや一人と一匹、ではなく女神と犬になってしまった男は黙って家路についた。

部屋に戻るとアンネローゼは、ユニットバスでシャワーを浴びせて治郎の身体を温めてやった。その後ふたりで唐揚げを食べながら、冷蔵庫の缶ビールを開けた。

「別にあなた、彼女に振られたわけじゃないでしょ？」

アンネローゼが自分のグラスと治郎の深皿にビールを注ぐ。舌ですくうビールの味は、人間の身体で飲むビールよりほろ苦く感じた。「サービスよ。」

そう言いながらアンネローゼが次々と冷蔵庫から取り出した缶ビールは、明らかに治郎が買い置きしていた本数を上回っていたのだ。治郎はかなり酩酊し座布団の上で丸くなった。自分にアンネローゼが毛布をかけてくれたことを、治郎は気づくことなく眠りに落ちた。

c p t ・ 0 3 青い影（後書き）

プロコル・ハルムの「青い影」でも聞きながら読んでいただくと  
いっそう悲しくなることでしょう。

不意に治郎は目を覚ました。時計を見ると午後十時を少し回ったところである。二時間ほど眠っただろうか。座布団の上で身体を起こして、二度三度と頭を振った。アンネローゼと一緒にずいぶん缶ビールを開けたような気がしたが、不思議と酔いは残っていない。目が覚めてみると、何か異様なにおいが彼の鼻を刺激した。獣のにおい……そう思っただけで身体をひねり自分の体臭を確かめる。まさしく獣のにおいだった。

だが異様さを感じるにおいとは似て非なるものだ。不快感を覚えつつも、初めてかいだのではないにおい。よくよく思い出ししてみると、それは朝目覚めた時に自分から感じたにおいだった。

ひととけものの入り混じったにおい、それが室内に充満している。人間だった時にはわからなかった風の流れを身体で感じられるようになっていた。

「アンネローゼ！おい、アンネローゼ！」

治郎は四足で立ち上がりながら、今日出会ったばかりの女性の名を呼んだ。だが返事はない。ベッドに乱れは見られず、彼女が横になった様子は無さそうだ。広くも無いマンションの部屋を歩いて玄関に行くと、ドアがわずかに開いていた。そこから吹き込む風に乗って、先ほどから感じる異臭が強くなった。

アンネローゼは外へ出たのだ。ドアを完全に閉めていないのは、犬になった自分にも開けられるようにとのことだろう。

異臭を感じることに、治郎は本能的な危険を察知していた。だが、それでも彼は外に出た。俺は犬じゃない、それを証明するものは本能を押し切る理性しか無かったのだ。

駅前通りまで治郎は走り出た。不況のあおりで夜に出歩く人間が

少なくなっている。だが日曜の夜とは言え自家用車もタクシーも全く通っていないなど、寂れつつある田舎街とは言えあることではない。常夜灯が空しく街角を照らし、聞く者のない歩行者信号の誘導音が響いている。酔漢すいげんの怒声も客引きの卑屈な声もしない、不条理な静けさが辺りを支配していた。

その静寂よりも、治郎には風のおいの方が気になって仕方なかった。街に充満するひとけものの混合臭が鼻を刺すが、どこに行っても逃れられるわけではなかった。

人気の無い往来を渡って行きつけのコンビニを目指した時、路地に人影が見えた。休日出勤をしていたサラリーマンだろうか、くたびれた背広を身につけた中年男だった。その男がゆっくりと治郎に向かつて歩いてくる。治郎が後ろに引けば男が更に間を詰めてくる。

街灯の光が届く所まで来た時、治郎は男の顔を見て愕然とした。

ネクタイを締めた首の上に乗っかっていたのは、茶色い毛並みの犬の頭だった。

「うわぁー。」

叫びながら治郎は逃げ出した。今朝鏡に写っていた自分と似たような姿であったのに、その犬人間からはえも言われぬ恐怖を感じたのだ。表通りに飛び出した治郎は駅と反対の方向に走り出した。視線の先で、自動車販売店の影から大型犬が飛び出てきた。その後を三人の犬人間が、手にぼうきや棒切れを握って歩いてくる。大型犬は甲高い鳴声を上げて懸命に逃げていった。

犬人間は次々と路地から姿を現してくる。数が増すにつれて、独特の臭気が治郎の鼻をついていった。ひとりが治郎の姿を見つけて、のそりと身体の向きを変える。その動作にも目の動きにも意志と言うものが見て取れなかった。

後方から、別の犬の絶叫が聞こえる。犬人間たちが輪になり、その足の間から野良犬の姿が見え隠れしている。野良犬は次々と振り下ろされる棒で袋叩きにされていた。治郎は迷うことなく犬人間に飛びかかり、二人三人と立て続けに咬みついた。咬まれた犬人間が



驚きたじろぐと、他の者も動きを止めた。わずかな動揺がすぐさま伝播する、主体性の無い人間集団そのものであった。

「走れ！」

治郎は野良犬に命じた。手ひどく打ち据えられていたが、四肢に怪我は負っていないようだった。

犬人間が徐々に数を増やしていく。飲食店の制服を着た者、パジヤマ姿の者、中には全裸の男女もいた。つい今しがたまで普通に暮らしていた人間たちが、突如頭を犬に変えられたかのようなうだった。だらだらと歩き本物の犬を見つけては襲いかかる様子は、何者かに命じられ盲目的に従っているだけのよう<sup>つど</sup>に治郎には思えた。

治郎と野良犬が走り続けていると、先ほどの大型犬に追いついた。彼は二人の犬人間に挟み撃ちにされようとしていた。治郎が一人に咬みつくと、犬人間たちはほうほうの体で逃げ出していった。助けられた大型犬が治郎に擦り寄ってくる。そして野良犬が天を仰ぎ遠吠えすると、大型犬もその声に唱和した。

「リーダーだっ！」

「ここに強いリーダーがいるっ！」

「集まれ、集まれっ！」

「リーダーのもとに集<sup>つど</sup>うんだっ！」

二頭の遠吠えがそう告げるのが、何故か治郎にもよく理解できた。それでどこに集まるんだろう、そう思っていたら吠えるのをやめた野良犬と大型犬がじつと治郎を見つめるではないか。

「もしかして……俺？」

街中で逃げ惑っていた犬たちが続々と集まり、五十頭を超える集団を形成する。仔犬や小型犬を中央に集め、大きな犬や若い力のあ<sup>もと</sup>る犬が外側を固めていく。治郎の指揮の下に防<sup>もと</sup>御姿勢を固めつつ、幹線道路を横断し西へと移動していった。犬人間たちもその数をさらに増やして集まっていく。服装がまちまちである所を見ると、老

若男女問わず犬人間へと化しているようだ。統率された行動を取っていないので逃走の余地は十分にあるのだが、とにかく絶対数が違う。躊躇してはたちまち取り囲まれてしまうことだろう。

犬人間の異臭を避けて川の方へと集団を誘導していた治郎だったが、全軍に停止を命じると単身で土手を駆け上がり対岸を眺めた。一旦高所に逃れた方が良いだろう、古戦場跡地に造成された城址公園までならさほど時間はかからない。

「橋を渡れ！」

上空を向き遠くへ声を響かせるようにして、治郎はそう叫んだ。リーダーの頼もしい指示を聞いた犬の隊列が一斉に土手を駆け上がる。少し離れた所からも、治郎の呼びかけに応える鳴声が聞こえてきた。遅れて合流しようとする犬たちの気配が感じられる。治郎は最初に部下となった野良犬と大型犬に先導を命じて先発させると、勇気のありそうな若犬を選んで声をかけて殿軍しんがりを務める別働隊を組んだ。それは偶然にも全て白い犬で編成されることとなった。

治郎は別働隊を率いて土手を駆け下りる。続々と集まる犬たちに隊への合流を促した。中には犬人間に手ひどい傷を負わされた者もいた。手負いの後続が混じれば行軍に乱れが生じると見てとると、治郎は遠吠えで本隊に減速を命じた。その時、犬たちを追って暗がりから犬人間の一大団がゆっくりと近づいて来るのが目に入る。

白犬たちを率いて犬人間の先頭集団に迫り一斉に吠え立てる。主体性も戦略も持たぬ犬人間は恐れをなして退いていった。別の一角からも犬人間が姿を現すと、治郎は配下と共にそちらに急行し牙をむく。この際、戦力の分散は逆効果だ。機動力の優位を駆使して敵の先鋒を片端から追い返していくのが唯一の戦術である。敵は総数において圧倒的に勝るからだ。

敵？

治郎は自分が思ったその言葉に愕然とした。自分も昨日まで人間だったはずである。それが今や野良犬飼いだ混成軍団の統率者リーダーである。そしてそれに迫る犬頭族ドッグスヘッドは間違いなく人間だったはずだ。その

ことは治郎自身が最も良く知っている。しかしながら、犬頭族は何らの意図を感じさせずただ犬たちを追っただけである。無自覚に、ただ自分たちと似て非なる者を叩こうとするだけなのである。彼らの瞳の色を見ると、治郎はおぞましさに禁じえない。

自分は犬のような人間なのか、それとも人間みたいな犬なのか。そう自問自答しながら、一団の最後尾を守りつつ治郎は橋を渡ったのであった。

橋を渡り、対岸の県道を北上する。直進を続ければいずれ東西に走る国道に到達し、国道を越えれば広い砂丘に通じる。そこまで逃亡することになるのかどうか、治郎も予測はできなかった。県道沿いにはまだまだ多数の集落があり、そこから犬人間が現れてくることは想像に難<sup>かた</sup>くない。一旦城址公園に逃ればしばらくそこで様子を見ることもできるし、犬たちなら森を抜けて脱出することも困難ではないはずだった。

そんなことを考えながら走っていると、土手下の住宅地から複数の犬の悲痛な鳴声が聞こえた。そこは治郎が日中に訪れた、可南子の住む街だった。

「大将、ここはあつしの弟分が縄張りになっている所でございやす。あつしはこの傷でもうどうにもならねえ、どうか助けてやっておくんなせえ。」

左の後足に傷を負った老犬が治郎に懇願した。悲痛な声で「わんつ」と鳴いた一言に、熱い気持ちが込められている。先頭集団に異常は無い、今なら隊を離れることは可能だ。

「続けっ！」

隊列を離れ土手を駆け下りる治郎に、白犬たちが追隨する。ゴミ集積場の角を曲がり住宅地に突入すると、そこは有象無象の犬頭族で溢れかえっていた。さして多くもない犬たちを街中の犬人間が取り囲んでいるであろうことが、において判別できた。

治郎が走りながら咆哮を上げると、後続全てがそれに倣<sup>なら</sup>って吠えた。突撃する白犬の集団に、犬人間は恐れの色をなして道を開ける。そこに割って入り野良犬を救出し、白犬たちは更に他の犬頭族の集団の中を駆け抜ける。

南北朝、梁の武帝の御世にあつて度々北魏の軍勢を撃破した將軍、陳慶之。彼は白馬白装の騎兵「白袍隊」を指揮し、寡兵を以ってしばしば大軍を屈服せしめた。

治郎が率いる白犬の群れは、まさに戦場を行く白袍隊のごとく敵を追い散らしていた。進むだけで犬人間は散り散りに逃げていく。彼らには明確な意思があるのかわからない。治郎はそれを好機と見た。

すぐ後ろを走る白犬に短く指示を与えると、治郎は隊の先頭から離脱した。しかし白袍隊はそのまま走り続け、犬人間たちをかく乱させていく。ちなみに治郎の指示で隊を率いるのは市議会議員である鈴木氏の飼い犬、イチローくんであった。

隊列を離れた治郎は一軒の民家の庭先に飛び込んだ。鎖に繋がれた猟犬種が、パジャマ姿の太った男に蹴り続けられていた。太った男の首には当然犬の頭が乗っている。治郎がその尻に思いつきり咬みつくと、犬男は恐れをなして塀を乗り越えて逃げていく。痛めつけられた猟犬種は、よろめきつつ起き上がり塀の向こうへ気遣わしげな視線を向けていた。逞<sup>たくま</sup>しくもしなやかなるその肢体は、彼の血統の純潔さを表すものである。脈々と受け継がれてきた忠誠心を、彼は人ならぬものとなり自分を打ち据えた飼い主に向けているようだった。

だが、このまま鎖に繋がれていては彼の身が危ない。治郎は猟犬種を戒める首輪に咬みつき食い干切ろうと試みた。猟犬種もまた戒めから逃れようと身をよじるが、高級品と思しき首輪は抜ける気配も干切れる様子も見せなかった。治郎が焦りの色を濃くしたその時である。

金属が激しくこすれる音がして、首輪の付け根から数えて三つ目

の鎖の輪が弾け飛んだ。何やら焦げるにおいもするが、引っぱって千切れたのではなさそうである。治郎は不審に思ったが、とにかく躊躇する獵犬種を急<sup>せ</sup>ぎ立てるようにして庭から出た。

そのまま治郎は数軒の庭先で繋がれたまま脱出できずにいた飼いたちを救出した。すんなりと首輪が抜けたものもいれば、そうでない場合もあった。だが首輪が外れない時は、前触れも無く鎖が弾け飛んだためそう時間はかからなかった。

「アンネローゼ、どこかで見てんのか？」

おそらく最後の一頭であろうぶち犬を救出してから、治郎は暗い空を仰ぎ見た。姿を消したアンネローゼがどこにいるのか、彼にはわからなかった。女神のくせに、手をこまねいているうちにひどいことになったじゃないか。腹立ち紛れにつぶやいた言葉がただのうなり声になっていたことに、興奮した治郎は気づいていなかった。

その興奮がふいに収まる。目の前を見覚えのある小さな犬が通った。怯える声で吠える小犬の視線の先にいる犬人間、いや犬女は治郎が見たことのある服を身につけていたのだった。

目の前で尾を逆立てながら甲高い声で吠える小さな愛玩犬に、治郎は見覚えがあった。可南子はこの小犬を「ラニくん」と呼んでいた。今日の午後、可南子は怯えるラニくんを胸に抱きながら自分を追い払おうとしたのである。

その小犬が、ラニくんがまたも怯えて吠えていたのだ。やかましく吠え立てるその先にいるのは、空色のワンピースを着た女である。首からは足元できゃんきゃんと吠える小犬と同じ頭をしている。

その犬女が可南子であることに治郎はすぐに気がついた。ラニくと名づけられ可愛がられていた小犬にもわかつてはいるのである。だが、彼には可南子の身に何が起きているのかは理解できないのかもしれない。まして、今まで溢れる愛情を注いでくれた飼い主が手に持ったアルミ製のスコップを自分に振り下ろそうとしている

など、本能で危険を察知していたとしてもラニくんには信じられないのであろう。

犬女はその表情を動かすことなく、小犬目掛けてスコップを打ち付けた。硬い激突音が耳を突く。飛び出した治郎がラニくんの首筋を啜えて引きずり、犬女の打撃をかわしたのだった。そうでなければほんの小さな愛玩犬の身体など、一撃で体中の骨を砕かれたことであろう。

スコップが再び振り上げられる。治郎は背後にラニくんをかばいながら、犬女に向かって吠えようとした。一声上げれば、犬頭族たちは簡単に怯え逃げ去るのはわかっていた。だが、治郎にはできなかった。無表情で身構える犬女が、可南子と似ても似つかぬ顔をしているにもかかわらず、スコップが届く位置まで近寄ってきて吠えて追い返すことができなかった。

突如犬女の持つ柄の部分が砕け散り、アルミのスコップは派手な音を立てて地面に落ちた。その音に我に返った治郎は身を翻し、小さな愛玩犬の首筋を再び啜えて走り出した。救出した犬たちを交えた白袍隊と再び合流した治郎は、先頭を切って土手へと向かって駆けた。

白袍隊は懸命に走って城址公園を目指した。先に行った本隊はすでに公園内に入ったようだ。小高い丘の上へと続く道路を、治郎はラニくんを啜えたまま駆け上がった。治郎が到着すると、集まっていた全ての犬が喚声で迎え入れた。ようやく立ち止まりラニくんを地面に下ろすと、きょとんとして自分を見つめる小犬に向かって治郎は言った。

「言っとくけどお前を助けたわけじゃないぞ。可南子のためだからな。」

「嫉妬やきもちなんてせつないでしょ？」

そう言われて治郎はどきっとした。

「お、お前みたいな犬に妬くもんか！」

「ちよつと。こつちよ、こつち。」

そう言われて慌てて後ろを振り返る。話しかけたのは、初めて現れた時と同じ紅い神衣ドレスを身にまとったアンネローゼだった。

「お前、今まで一体どこに……。」

「この公園であなたが来るのを待ってたのよ。お陰で街中の人間が集まったから、処理するのが楽になったわ。」

「処理ってなんだよ？」

その言葉に違和感を覚えた治郎だったが、アンネローゼの手に握られた物を見て驚いた。彼女は一丁の機関銃を携えていたのである。

c p t ・ 0 5 女神の鉄（くるがね）

「お、お前何を持ってるんだよ？」

治郎は低い声でうなつたが、仮に人間の姿であつたとしても同じようにうなつたに違いない。アンネローゼが手にしている物体は女神が持つに不釣り合いな物であつたし、女神ならずも一人の女性が扱える代物ではなかつた。

「何って、人間界じゃこれを機関銃って言わないの？」

アンネローゼはことも無げに言つたが、そつ言つ問題ではないだらう。

治郎には何かの映画で見たような気がするという程度の知識しかないが、その機関銃は人間界で一九三〇年代に製造された物の複製品である。天上界においてはしばしば人間界の技術工芸品が模倣される。永遠の生命を持つ者には創造することのできない物というのは確かに存在するのである。

一般的に言つて火薬の爆発や気体の圧力で射出された弾丸の運動エネルギーにより対象を損壊させる人間界の銃器は、神々にとって命を脅かす凶器（おこころを）とはなりえない。したがつてアンネローゼがこの種の火器重火器を所持していることは天上界にあつては違法行為ではなく、決して一般的とは言えないが趣味として蒐集（コレクション）している神属は少なくない。彼らにしてみれば神軍の特殊機械化部隊や治安維持軍において制式化されている、超科学技術により製造される銃器など何の面白味も無いのであつた。

しかし蒐集はともかく、銃器を人間界で使用するとなると当然神界当局に届出が必要になる。だが銃器よりも人間にとって危険な法術は数多く存在するし、天上界における神々の居住区にあつて使用を制限されるのは銃器よりむしろ攻撃系の法術である。

ベルダンデーが風の女神として知られるように、アンネローゼは火の女神なのである。しかし彼女が司るのは吹き上げる炎ではな



く、銃身内部で炸裂する火薬であつた。

気がつけば城址公園の入り口に至る坂道には、犬人間たちが殺到していた。無気力そうに、盲目的に、ただ何者かの命令に従つて犬たちの後を追つてきた犬頭族がゆつくりと押し寄せている。それを高所から眺めながらアンネローゼは、機関銃にこれまたどこからともなく取り出した五センチほどの幅のベルトを装着していた。その表情は美しく、だが妙ににやけて見えた。

「それって、まさか本物の銃弾か？ 撃つ気なのか、アンネローゼ。」  
「敵が集中しているのよ。一斉掃射には絶好の機会じゃない。」

脇を閉め軽く両足を広げて、わずかに腰を落とす。犬人間の群集目がけて機関銃を構えると、アンネローゼは声を上げた。

「治郎、離れてなさい。」

言うが早い。アンネローゼは神差指ひとさしゆびをかけて引金をひいた。銃身内で炸薬が点火する音、非分離式金筈メタルリンクが給弾ベルトを引き込む音、そして輩出された薬莢が地面ではねる音。轟音と共に機関銃の筒先マズルから射出される銃弾が、光を放ちながら闇夜を飛んでいく。坂道を上がり肉薄していた犬人間が、毎秒十五発近く撃ち出される弾丸に次々と倒れていった。

アンネローゼはその場から歩み出すことなく、後に続く犬人間に射撃を与え続けていった。一体の異形の犬が二十発近くの銃弾を受けて倒れていく。休むことなく引金トリガーを引き続けているが、アンネローゼは一向に疲労の色を見せない。彼女の足元にうず高く積まれたベルトは絡むことの無いようにきれいに巻かれており、目詰ることジャムなく続々と連なる犬頭族の一団を撃ち倒していったのである。

治郎も詳しいわけではないのだが、機関銃という代物はそう軽いものではなく概ね十キロを超える重量がある。まして射出の反動が重なれば腕力だけで支えるのは困難であり、連射の際は二脚や銃架でその銃身を支えるものである。だがアンネローゼはそんなことお

構いなしの態で、嬉々として連射を続けていた。

治郎を慕い集まった犬達が恐れをなして逃げ散っていく中で、治郎は呆然と犬頭族が倒れていく姿を眺めていた。数千人の犬人間が全て倒されるまでももの数分のことであつたが、治郎にはとてつもなく長い時間に感じられた。給弾ベルトが送りつくされ、機関銃の金筈メタルリンクが空回りをするまでアンネローゼは射撃を止めなかつたのであつた。

「ふう、できたらもうちょっと撃ちたかつたわね。」

「お前、何考えてんだよ！こいつらみんな殺さなきゃならないのかよ、魔法で元に戻してやれなかつたのかよ！」

そうまくし立てる治郎の言葉に、アンネローゼは機関銃の可動を点検しながら答えた。

「さすがは犬ね、血のにおいに敏感ですこと。」

そう言われて治郎ははつとした。銃殺されたはずの犬人間の群れからは、確かに血のにおいを感じられなかつた。近寄って折り重なるように倒れている犬人間に鼻先を近づけるが、外傷は見当たらない。幸いと言うべきか、治郎は先頭集団の中に空色のワンピースを着た犬女の姿を見つけ出すことができた。

「可南子、大丈夫か？」

可南子は治郎の呼びかけにも目は覚まさなかつたが、浅い呼吸に乱れは無かつた。着衣には弾丸が当たつたらしき十数ヶ所の焦げ目こそあつたものの、肢体に被弾した様子は全く無い。治郎がアンネローゼの元に駆け戻ると、彼女は給弾ベルトを外してサドル型の弾マガジン倉を機関銃に取り付けているところだつた。

「みんな、死んでないんだよな？」

「当たり前でしょ。犬達に理不尽な暴行を加えた罪はあるにせよ、彼らも呪いの被害者だわ。それを女神であるこのわたしが殺戮したりするもんですか。」

その語尾にカシャッという金属音が重なつた。

「さっき撃つたのは全部空砲よ。着火と同時に薬莢に書き込んだ法スベル

術言語が発動して、実弾の軌跡を光だけがなぞるようにしてあったの。そのせいで痛みはなくても撃たれた気になっちゃうつてわけ。」

「あいつら撃たれた気になっただけで気絶してるのか？」

「真っ赤に焼けた鉄串を当てられてるって暗示をかけられたら皮膚に水ぶくれができた、なんて話聞いたことない？ あれだけの人数を法術で眠らせてたら、わたしの方が消耗して倒れてしまうわ。こういう時に備えて特注の空砲を用意していたの。」

「だけど、ずいぶん嬉しそうに撃ってたじゃないか。」

「趣味ですから。」

そう言ってから再び機関銃を構え直したアンネローゼは、城址公園の中央を目指し歩いていった。治郎も慌てて後を追う。

「治郎、今まで話さなくて悪かったわ。わたしにはあなたが呪われた理由が、街と一緒に歩いた時からわかっていたの。」

「どういうことだよ？」

「あなたを呪った魔属は、あなただけじゃなくてこの街の人全員を呪っていた。たくさんの人に呪いをかければ、中には女神の救済を得られる幸運の持ち主がいるはず。現に治郎はいち早く犬人間になりながらも意識を失うことなく、わたしに電話をつなげることができた。」

「それじゃ、その魔属つてのが俺や可南子を犬に変えたのはお前を待ち伏せするためか？」

「別にわたしじゃなくてもよかったんだと思う。解呪であれ戦闘であれ、大勢の犬人間を相手にすれば女神でも消耗する。そこを狙おうと画策したつてことよ。」

「何のために？」

「さて何かしらね。とりあえずわたし、デートのお誘いは基本断らないんだけど。」

そう言ってからアンネローゼは突如闇に向かって機関銃を正射した。一秒に満たぬ間に射出された十数発の銃弾が暗闇に消える。だが、少しの間があつてからカラカラと金属片が地面に落ちる音が響

いた。

「防がれたようね。天上界の工房謹製ホローポイント弾も当たらないきや意味ないか。」

やがて近づいてきた静かな足音にアンネローゼは銃を構え直し、治郎は身を低く構えながらうなり声を上げた。

「治郎、彼があなたを犬にした張本人よ。」

賢明なる読者諸兄はご記憶のことと思うが、白戸治郎を最終的に犬の姿に変えたのはアンネローゼである。

闇の中から現れたのは、端の擦り切れた黒い外套インパネスに身を包んだ男だった。治郎が男だと思ったのはその体格を見てのことで、実際には外套インパネスのフードを目深まぶかに被り更に妖しげな仮面をつけていたため顔は一切見えなかった。底の厚い革靴の足音が静かに近づいてくる。

アンネローゼは銃の筒先マズルを男に合わせたまま、じりじりと後ずさり間合いを取っていた。歩きながら男が右手を上げると、突然何の飾り気もない鉄の棒が出現した。

「暗闇杖ナイトロッド……ちよつと面白くないかな。」

そうつぶやくとアンネローゼは敵の腹部一点を目掛けて銃弾を放った。男が杖ロッドを小さく振ると銃弾が命中する直前で動きを止め、地面に落ちた。今度は男の足元を狙う。男は飛びずさって弾幕をかわすが、アンネローゼは更に男の着地地点目掛けて銃を掃射する。男は空中で体向を変えると杖ロッドを振り回す。回転した杖が空間に穴を開け、アンネローゼが放ったホローポイント弾は亜空間へと消え去った。

弾幕を避けて着地した男が一直線にアンネローゼへと突き進んでくる。男の頭部へ狙いを定めたアンネローゼだったが、引金トリガーをひく寸前に撃つのをやめ空中へ逃れた。アンネローゼの立っていた場所に男が杖を横薙ぎに振るう。射撃をわずかも外せば、アンネローゼに相手の攻撃をかわす時間は無かったはずだ。十メートル程も上

昇すると、アンネローゼは空中から機関銃を乱射した。踏ん張りが利かないので敢えて狙点は定めず、男の立つ周辺目掛けてとにかく撃ちまくった。

男は杖の端を持つとその場で旋回する。暗闇杖を半径とした円が男の立つ中心のみ残して、再び亜空間への穴となった。アンネローゼの銃弾は全て吸い込まれていく。男に向かって直進していた弾丸ですら、軌道を変えて亜空間へと吸い込まれていった。弾丸だけではない、アンネローゼ自身も重力より亜空間の吸引力に吸い寄せられている。男は手を伸ばし、アンネローゼの身体をつかもうとしている。

「やっぱり、女神が狙いつてわけね。」

過日人間界に降臨した二級神イクーが魔属の襲撃に遭い、救出に向かったベルダンデーもその魔属の虜となりかける事件があった。管理主任が激闘の末その魔属を封印したが、人間界で女神と接触を図り拉致しようと画策する魔属の存在があきらかになったのである。神魔両陣営とも相手方の殺害については、戦場を除いて極力避けているのが実態である。女神の拉致について魔界中枢の政治的意向が働いているのか否か、神さまの公式見解は表わされていなかった。

アンネローゼの飛行能力では亜空間の力に抗しえなかった。背後から守護天使を呼び出し、力を合わせてようやく空中に踏みとどまった。アンネローゼの天使は、いわゆる天使の姿を持つてはいない。紅い外装のジェット戦闘機に手足がついた機械体の天使である。天使は両足からの追燃噴流で女神の身体を引き上げる。その間もアンネローゼは魔属の男に射撃をくわえ続けたが、全ての銃弾が弾き返された。

天使から離れたアンネローゼは空中で一回転して着地した。機関銃を魔属の男に向けながら呼吸を整える。魔属の身体を貫くことが可能であるホローポイント弾を用意していたが、敵の暗闇杖の魔力に対抗できていないようだ。魔属自身の能力もアンネローゼを凌駕しているかもしれない。もし彼が犬頭族を覚醒させて襲撃させてき

たら……、その想像にアンネローゼは戦慄した。退くわけにはいかない。

頭上に放り上げた機関銃が分解され天使の機械体に組み込まれ、代わりに別の装備がアンネローゼの手元に下りてきた。人間界の対戦車ライフルを参考に、天上界の工房で作られた口径二十ミリ超の重火器である。いかな射撃に長じた女神であつても二脚無しでは構えられぬ巨砲だが、アンネローゼは即座に初弾を発砲した。

魔属の男がこれも亜空間に追いやつてかわしたが、男の想像以上の速さでアンネローゼは連射した。しかも狙いは正確である。銃撃が亜空間防御の速度を上回り、男は銃弾を直接杖で叩き落す。だが五発目を叩いたところで二十ミリ弾の強度に屈し、ナイトロセル暗闇杖は真ん中からへし折れた。

あと二発、そう思つてアンネローゼが引金をひくと同時に男は折れた杖を投げつけた。マスル筒先部分で銃弾と杖が衝突して、銃身が大きく腔発した。その衝撃に倒れこむアンネローゼ、身体を起こそうとした時にはすでに男がのしかかり細い首に手がかけられていた。

アンネローゼは必死に抵抗したが、男の膂力に抗うことができなかった。男の被る白い仮面は両目と口の部分に細い切れ目が入り、まるで仮面そのものがアンネローゼに狂気と殺意を向けているように思われた。

男は左手でアンネローゼの首を絞めながら、右手を神衣の襟にかけた。特殊な繊維で織られた生地はそう簡単に破れはしない。だが男の行為がアンネローゼに恐怖心を与えたのは事実であり、男が尋常ならざる魔力を行使して神衣を千切らぬとは言い切れなかった。恐怖心と同時に湧き上がる怒りを、アンネローゼは必死に抑えていた。彼女の持つ火の属性、それは雷の属性と並んで強い感情が法術の発動に強く影響する。怒りに身を任せてしまえば、魔属の男に対抗しうる炎をアンネローゼは吹き上げることができるかもしれない。

だがそれはしてはならなかった。

彼女は天上界に転生する前のことは全く覚えていない。だが女神の神格を与えられる前、時として激しい怒りに多くの者を傷つけてしまったことがある。心の内に秘める愛情、熱情、願望、欲望、それらに一度火がつけば彼女は全てを巻き込む炎となり彼女自身すら焼き尽くす。あるいは人であつた前世においてそのような人間だつたのか、そのような人間の血統であつたのだろう。

アンネローゼが本気で炎の法術を行使すれば、今いる人間界の街を全て燃やしても収まることはないだろう。それだけ制御困難な力があつたが故に彼女は一級神二種限定解除の神格を遂に得られなかったのであり、戦闘において銃器火器を使用することで力の暴走を防いでいたのだつた。

アンネローゼがひどく消耗したのを見て、魔属の男は左手を彼女の首から離す。そして両手に闇をまとわせると、アンネローゼの襟を引きちぎろうと更に力を込めた。縫い目が弾けることにアンネローゼは恐怖を感じた。意識が飛びそうだった。こみ上げる怒りに負けそうになった。

「ぐおお、はっ、放せ！」

魔属の男が初めて声を上げたと同時に、アンネローゼから手を離れた。男の首筋に治郎が咬みついていた。男は始めから治郎のことなど念頭に無かつたし、実際ただの人間であろ<sup>う</sup>が犬になつた人間であろ<sup>う</sup>が本来なら男の身体に傷をつけることなどできるはずがなかつた。だがアンネローゼに抱いた劣情により、彼は完全に油断していた。それゆえに治郎の牙は男の首筋に深く刺さり、もがいても振り払うことはできなかった。

「治郎！」

アンネローゼは立ち上がりながら叫んだ。首を絞められた苦痛と陵辱されるかと思つた嫌悪感、さらに自分が怒りの感情に負けそうになつた恐怖にアンネローゼは疲弊しきつていた。だからすぐ治郎に加勢することができなかった。

治郎は必死だった。アンネローゼと魔属の男の戦闘が始まると、恐怖に身がすくみ一步も動けなくなっていた。だがアンネローゼが男に組み伏せられるのを見た時、恐怖心を押し切って飛び出した。男の喉笛に牙を立て、力の限り咬みついていた。幸運だけではない、暴行を受ける犬や女を見て守ろうとする彼の心こそが天意に通じたのだ。

魔属の肉体は人間など比べ物にならぬ強度を持っている。だが、魔界の龍などには及ばずとも食い込んだ犬の牙を強引に引き剥がせば、引き裂かれた喉笛からの失血で力を大きく失うに違いない。そうなれば女神に対抗できなくなる。だから、彼は自らに呪いをかけた。何かを代価にして、治郎の牙から逃れようとした。

呪いが達せられたため、治郎の身体はいとも簡単に男から引き離された。首筋をつかまれ放り投げられた治郎は、公園のブランコに激しく叩きつけられた。地面に落ちた治郎の口には、何か光る帯のような物が咥えられていた。

「治郎、それを放しちやだめよ。呪いの解呪符<sup>バスコード</sup>だわ。」

男がそう叫ぶアンネローゼの方へ視線を移した。ふらつきながらも立ち上がったアンネローゼが、左手で神衣のスカートをまくり上げていた。あらわになった左の白い大腿<sup>ふともも</sup>にまきつけられた拳銃<sup>ホルスター</sup>囊から九ミリ銃を取り出し、男の頭部めがけて正確に三発発射した。

至近距離から撃たれた弾丸が命中し、男の被っていた仮面が碎けて落ちた。



アンネローゼは左の大腿<sup>ふともも</sup>に装着された拳銃<sup>ホルスター</sup>囊から九ミリ銃を取り出すと、左手で撃鉄<sup>ハンマー</sup>を起こしながら三発、仮面の男に目掛けて撃ち放った。弾丸を受けた仮面に亀裂が入り、男が動きを止める。アンネローゼは男の次の動きに備え、大きく息を吸い丹田に力を込めた。例え刺し違えてでも、あの男を焼き尽くす！

内なる炎で我が身もろともに燃やし尽くす覚悟でなければ負けると、アンネローゼは腹をくくった。しかし魔属の男は、仮面が砕け散ると同時に左の腕で顔を覆い隠し、じりじりと後ずさっていった。一瞬だけ見えたその顔は、アンネローゼの記憶中枢に焼き付けられた。赤黒い髪と髭、そして太い眉。その下の眼光は鋭く、彫りの深い<sup>たくま</sup>逞しい顔つきをしていた。だがそれよりもアンネローゼの目をひいたのは、額や目尻に深く刻まれた皺であった。

神属と同様、魔属もまた永遠の命を持つ者である。従って老いとも縁がない。だからこそアンネローゼは、その皺が意味するところ<sup>ところ</sup>が何だったのか疑念を抱いたのだった。男はそのまま静かに闇の中へと姿を消し、アンネローゼは黙ってそれを見送った。

「これ何とかしろよ！こいつで呪いが解けるんだろ？」

そう治郎に声をかけられて、アンネローゼは我に返った。振り返ると男から奪った光の帯を咥えながら治郎が近づいてきていた。アンネローゼは手を伸ばし治郎からそれを受け取った。治郎と、この街の全ての人間にかけられた呪いの解呪符<sup>バスコード</sup>である。当面の危機が去った以上、契約の履行こそアンネローゼが本来行すべき仕事であった。

アンネローゼは小声で法術言語<sup>スペル</sup>を唱えながら、光の帯を放り投げた。解呪符<sup>バスコード</sup>は空中で螺旋状に回転しながら発光を強め、周囲に展開していった。治郎の目にはただの光の集まりにしか見えないが、魔術言語で書かれた解呪符をアンネローゼは神語へと翻訳し読み上げ

ていった。一節ごとにアクセントをつけ、やがてそれはメロディとなっていく。アンネローゼの歌が躍動的なリズムを打ち出していくにつれ、光の帯はその色を紅く変化させていった。

アンネローゼの歌に聞き惚れていた治郎であったが、気がつけば逃げ散っていた犬達が歌につられて集まっていた。集まった犬達が声を上げる。それもむやみに吠えるのではなく、大きな犬はアンネローゼの歌の後拍に合わせてリズムを刻み、小さな犬はハーモニーハイトーンを唱和する。犬達の伴奏に支えられて、アンネローゼの歌は高音へと激しく駆け上がっていった。

そして光の帯は街全体を包み込むほどに拡大したのである。

治郎はあまりのまぶしさに目を閉じた。ほのかな熱に身をくるまれ、全身に痒みを感じた。手を伸ばして胸の辺りをかくと、皮膚に爪が当たるのを感じた。

毛が、無い？

目を開けてみればそこにあるのは人間の両手であり、胸にも腹にも白い毛は生えていなかった。白戸治郎は人間の体に戻っていたのである。

「あなたの身体から無事に呪いが取り払われたわ。」

光の中で、アンネローゼが治郎の目の前に立っていた。

「あ、ありがとう。可南子は？可南子も元に戻ったのか？」

「ええ、彼女を含めて街の人全員元の姿に戻ったわ。これで契約は完了、わたし天上界に帰るわね。」

そう言いながらアンネローゼは治郎の身体を眺めていたが、やがて一点で視線を固定させた。

「人間も、男性の神属と変わらないのね。」

犬は服を着ないのだから、犬の身体から元に戻った治郎が何も着ているはずがなかった。

「見るなーっ！」

微笑むアンネローゼの姿が光に埋もれていった。

可南子は目を覚ました時、自分が何故ここにいるのか全く思い出せなかった。そこは知らない場所ではない。彼女の恋人の部屋であり、もう何度も訪れたことのある部屋だ。もっとも泊まったことは一度も無かった。治郎の眠るベッドに寄り添い座ったまま眠っていたのだ。

「昨夜は治郎さんとは会わなかったのに。」

まして愛犬を連れて出かけてはいないはずなのに、可南子の膝の上でラニくんが浅い寝息を立てていた。布団の中の治郎は、よく見ると何も着ていない様子であった。可南子は慌てて自分が衣服を身につけていることを確認した。昨日から着の身着のままのようである。そのことも、可南子には理由がわからなかった。

「治郎さん、起きてください。」

眠る治郎の身体を揺すり、可南子は彼を起こそうとした。その拍子にラニくんが目を覚まし、可南子の膝から降りてベッドに飛び乗った。揺り動かされた治郎がうわ言のように口を開く。

「アンネローゼ。ちょっと待て、待ってくれ。」

「治郎さん！」

その言葉を聞いた途端に、可南子は怒って治郎を引きずり起こしたのである。

「治郎さん、アンネローゼって誰ですか！」

「え……ええっ？」

いきなり起こされて、目の前では可南子が激怒していて、おまけに自分だけが素っ裸であることで治郎はすっかり混乱していた。そんな二人の様子を小首をかしげて見ていたラニくんであったが、ベッドから飛び降りると掃出窓の方へぴとぴと走っていった。明るい日差しがガラス越しに部屋に入ってきている。窓の外で、街はいつも通りの朝を迎えていたのであった。

白戸治郎と可南子はこの翌年に結婚した。一男一女を授かり、経

済的に苦勞したりけんかをしたりしながらも幸せに暮らしていた。

結婚してから治郎の人柄に変化が見られるようになった。治郎自身は控えめに否定するのだが、発言や物腰に統率力が見られるようになったのである。会社の労働組合で執行委員となったことをきっかけに、実務においても頭角を現し他部門や年長の社員からも助言や助力を求められることが多くなった。

三十代半ばで組合執行委員長となり上部団体の役員も勤め、五年後には市議会議員として多くの人の声を代弁する立場となった。そして五十才を前にして、ついに市長選に出馬したのである。

その頃、市の財政は悪化の一途をたどっており新市長に期待する声が多い反面、候補者には厳しい目が向けられていた。政権与党の推薦を得ていた有吉なる対立候補は、ネガティブキャンペーン辛口毒舌で治郎の政治姿勢や人となりを批判した。苦しい選挙活動が続く中、治郎は家族に支えられながら市内を駆けずり回ったのである。そして迎えた投票日、近年にない高い投票率の選挙の結果、白戸治郎候補は僅差で当選し市長の座を獲得したのである。

勝利に沸いた選挙事務所を引き上げて、治郎と妻が帰宅したのは深夜のことだった。リビングのソファに腰を下ろすと、治郎は深くため息をついた。勝利の喜びはすでに彼の心から飛び去っていた。空前の財政難を抱えた市政を担うこととなり、早速明日から決裁を迫られる問題が山積みなのである。

「ねえ、あなた。先ほど事務所に外国人のお嬢さんがいらしたのに気づいてました？」

晩酌を用意しながら言った妻の言葉に治郎は驚いた。興奮し疲労もしていたものの、支持者ひとりひとりの顔はしっかりと見てきた。こんな田舎の街で目立つ外国人女性の顔を、見れば忘れるはずがないのだが。

「わたし、あんなきれいな金髪の人初めて見ましたわ。皆さんが万歳してくださっている中で、あの人一人だけじっとあなたの方を見ていらっしやっただですよ、とっても優しい笑顔で。」

治郎は突然、二十数年前に出会った女性のことを思い出した。自分と妻、そして街中の人間を助けてくれた彼女。突飛な行動に振り回されもしたが、思い出されるのは確かに優しい笑顔ばかりだった。どうやら今でも見守ってくれているようだ。だが、今度は手を貸さないというわけか。

そう思った途端に治郎の不安な気持ちは消え去っていた。まるで心が白い犬となり、軽やかに走り始めたようだった。

ふいに立ち上がって自分を振り返った夫が、妙に晴れやかな顔になっていたことに可南子は驚いた。そして白戸治郎は、妻に向かって静かにつぶやいたのである。

「彼女はね、女神なんだよ。」

天上界の夕刻、お助け女神事務所では終業時刻を過ぎほとんどの女神が帰り支度を始めていた。その中でベルダンディーはデスクに向かい報告書を作成していた。時間ぎりぎりまで現場に留まった上に、部下の報告書に目を通し修正を指示していたからである。

「おつかれさまでした。」

「んじゃ、おっ先。」

先輩であるフレイアとミソラも連れ立って帰っていった。ベルダンディーは端末をあわただしく操作して文書作成を急いだ。三神姉妹で同居するようになってしばらく経ったが、食事当番を決めたものの結局ベルダンディーが用意することがほとんどだったのである。「だって、わたしあんまり得意じゃないしい。」

そう言う姉が決して料理が下手なわけではないことはよくわかっている。

「お姉ちゃんの作るお料理、お母さんのより断然おいしい！」  
妹にそう言われてつい張り切ってしまうのである。

ようやく報告書を書き終わると手荷物をまとめ、ベルダンデューは席を立った。バッグを肩にかけ書類を胸に抱えて歩き出してから、自分の他にまだ残っていた女神に気づいたのだった。

「アンネローゼ、まだいらしたんですか？」

「うん、ちよつとね。」

曖昧に返事をしながら、アンネローゼは画用紙に向かい一心に鉛筆を走らせていた。

「わたし、この書類を管理課に提出して帰りますけど。」

「そののも一緒に出してくれる？」

視線を向けることなく言うアンネローゼの指示に従い、ベルダンデューはデスクの上の書類を手についた。よく見るとデスクの上にも周りにも、書き上げた画用紙が散乱していた。全て同じ人物の肖像である。

「これは誰ですか？」

ベルダンデューは足元に落ちていた画用紙の一枚を拾い上げながら尋ねた。素描とは言え精緻な筆遣いで描かれており、人間の目で見れば白黒写真と見紛うことであろう。

「今日人間界で遭遇した魔属。仮面を被ってたから一瞬だけしか見えなかったんだけど、こんな顔してたわ。」

鉛筆を巧みに動かしながら、アンネローゼは答えた。端正な顔だちに豊かな頭髮と髭、そして額や頬の深い皺……何十枚となく同じ絵を描き続けていたようである。

「この魔属がそんなに気になるんですか？」

「どこかで見たはずなんですけど、全然思い出せないのよね。」

女神は一度出会った者を忘れない、との慣用句が天上界には存在する。神格の高い者の記憶力のよさを表す言葉であるが、女神に限らず男性の神属とて高度な記憶力を有している。遙か昔に一度しか会っていない者のことでも、彼らはよく覚えているのである。

「思い出せないということは、実際に会った方ではなく写真か何かでお見かけした方なのでしょうか？」

「そうなのかもしれないわね。」

ひとつ息を吐き出すと、アンネローゼは立ち上がり散らかった画用紙を片付け始めた。

「後はいいわよ。わたし、伝票の整理して帰るから。」

「では、お先に失礼します。」

ベルダンデーは軽く頭を下げて、アンネローゼの前から立ち去った。

管理課のオフィスにも、課員の女神は誰も残っていなかった。照明を落としたオフィスの最奥部で、ひとり管理主任がデスク前面の空間に投影した写真に見入っていた。花嫁衣裳ウェディングドレスを身にまとった女神と、その右隣には高等科学学校の制服を着た若き日の管理主任が写っている。画像の片隅に刻まれた天上界の標準暦の日付は、彼女がまだ未成年であつたことを示していた。

思い出深い写真であるはずだった。だがそれを見つめる管理主任の表情は硬く険しいものだった。

手元の入力端末デヴァイスを操り、管理主任は画面上の写真をめくった。制服を着た写真の中の彼女は緊張した面持ちで立っていたが、花嫁の笑顔につられ次第にその相好を崩していく様が順を追って写っていた。しかし十数枚目の写真に写る軍神の礼服を着た新郎が共に並ぶ写真を見た時に、管理主任はさらに目尻を吊り上げてつぶやいたのである。

「待つてなさい。わたし、必ずあなたに復讐してやる。」

その時になって初めて、画面の向こう側に立ち尽くす女神がいることに管理主任は気がついたのだった。

「ベルダンデー、あなたいつからそこにいたのです？」

先ほどの言葉を聞かれたかと思い、管理主任は狼狽した。だがベルダンデーは空間に写る写真を裏側から呆然と眺めていて、管理主任の言葉など耳に入っていなかったようである。胸に携えた書類

を床に落とし、空間に写る新婦と新郎の姿に目を奪われていた。

「主任、この写真の女神はセックですね？では隣にいる新郎が……。」

「あなた、知っていたの？」

その言葉にベルダンディーはこわばった表情のままであつた。

「セック自身から、教えてもらいました。」

「そうでしたの。」

「この男性が、そうなのですね？」

「ええ、セックの夫よ。セックの娘を、彼自身の娘を使い乳児誘拐を企み、セックから全て奪った男。元亡命魔属のシアチよ。」

そう告げられて、ベルダンディーは改めて写真の男の顔を眺めた。赤黒い頭髪と髭、端正な顔立ち。顔に皺こそ無かったものの、つい今しがた見たアンネローゼの描いた肖像画と同一人物と言つて間違ひなかつた。

「どうしたのです。あなた、シアチについて何か知っているの？」

管理主任にそう尋ねられても、ベルダンディーは肩を小さく震えさせるだけで答えることができなかった。妻を捨て、妻から娘を奪い神界から魔界へ逃亡した男、ひとりの女神から全ての幸福を奪い去った男。その男が再び女神たちの前に姿を現したのであつた。

アンネローゼが描いた肖像画とは異なる、その双眸に温かい愛情をにじませるかのようなかつてのシアチの姿を見て、ベルダンディーは胸の奥を締め付けられるような気持ちになつたのである。



c p t ・ 0 6 色あざやかなる未来と暗い翳りと（後書き）

長いようで短い連載でしたが、今回を以って『いぬめがみつ！』終了でございます。犬のまんまの次郎さんは当選無効だったらしいですが、こちらの白戸治郎さんは今後市長として苦労することになるようです。日本と、日本のド田舎の未来に少しで明るい未来がやって来ますように・・・。

とつても有料にはできない稚拙な作品を読んでくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。

そして早々にお気に入り登録してくださった皆さま、ネーミングにお知恵をかしてくださったSさま、読んだ！とつぶやいてくださった皆さま、ありがとうございます。

我ながら中途半端な結末だったようにも思いますが、『北天女神譚異聞』シリーズは今後もボケあり不幸ありといった感じで続いくことと思います。

それではまた、次回作でお会いしましょう。  
皆さまに女神の加護があらんことを！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0342m/>

---

北天女神譚異聞～いぬめがみっ！～

2010年10月8日12時00分発行